\知りたい/　\伝えたい/

パラスポーツの魅力

順天中学・高校
社会福祉部 × ふくのわ

まだ着られる中古衣類の寄付で障害者スポーツ（パラスポーツ）を応援するふくのわプロジェクト（産経新聞社主催、オフィシャルパートナー・富士紡ホールディングス）はこの秋、中学生・高校生がパラスポーツの魅力に迫り、周囲に広める活動をサポートした。

活動を行ったのは東京都北区の順天中学・高校（長塚篤夫校長）の社会福祉部のメンバーたち。新型コロナウイルスの影響でオンライン開催となった同校の文化祭「北斗祭」のため、日本パラ・パワーリフティング連盟の協力で、選手のインタビューや校内で行った競技体験会を撮影した動画や新聞を制作、発表した。

部員の多くがパラスポーツ選手と接するのはもちろん、取材や撮影も初めての経験。戸惑いながらも協力し、10代ならではの身近な視点でパラスポーツ選手の素顔に迫った。一連の活動をリポートする。

撮影　萩原悠久人

9月上旬 プロジェクト始動

パラ・パワーリフティング動画の制作決定！

今年の文化祭の発表テーマが「パラスポーツ」に。日本パラ・パワーリフティング連盟の協力、ふくのわプロジェクトのサポートで、競技や選手の魅力を伝える動画を制作することに決まった。

Let's get started!

9/29 インタビューのコツを学習

新聞記者がテクニック伝授

パラ・パワーリフティング選手の取材に当たって、産経新聞記者からインタビューのコツを学ぶ講座を開催。競技や選手たちの魅力をより深く聞き出すために、「これは絶対に聞こう」というテーマを決めることや、できるだけ事前に情報を集めて準備すること、10代ならではの視点も大切であることなどを学んだ。

講座では選手たちに聞いてみたい質問を全員が検討。「なぜパラ・パワーリフティングを始めたのか」「どんなときに楽しいと感じるか」「食べ物や生活で気を付けていることは？」といった質問が挙がった。

部活動の時間に行われた出前講座で、新聞記者からインタビューのコツを学んだ

10/18 佐野選手を取材

食生活は？　部員も競技体験

日曜日のこの日は、東京都調布市にある日本パラ・パワーリフティング連盟の拠点の一つ、「パワーハウス」で佐野義貴選手のトレーニングを取材。食生活を尋ねると「チョコレートが大好き」と意外な答え。だが、炭酸飲料は取らず、夜は炭水化物を控え、卵や納豆などタンパク質を豊富に取っているそうだ。

「試合で緊張しませんか」という質問には「子供の頃から野球をしていたので、緊張したことはない」んだとか。パラ・パワーリフティングでは「重い物を持ち上げるのは自分の力だけど、自分だけの力じゃない。いろんな人に支えられて挙げられる」。

部員たちも軽いバーベルで競技を体験＝写真左下、美しく挙げる難しさを実感した。

さの・よしき　男子65㌔級、52歳。小3から野球に打ち込み、山梨学院大付属高野球部主将として活躍。高3の夏に交通事故で車いす生活に。2003年にパラ・パワーリフティングを始め、72㌔級、65㌔級の2階級における元日本記録保持者。

10/19 森崎選手オンライン取材

「前向き」感心　素顔は同じ女子高生

森崎可林選手は同世代。最初こそ緊張気味だったがすぐに打ち解けた。

「東京パラリンピックが延期されてどう思った？」との質問には「準備期間が延びてチャンスだと思った」。前向きな姿勢に「『落ち込んだ』という答えを予想していたのに」と質問した部員は感心しきり。

「パラ・パワーリフティングって奥が深い」と話した森崎選手。取材を終えた部員は「日本記録保持者だからドキドキしたけど、素顔は私たちと同じ女子高生だった」。

もりさき・かりん　女子67㌔級、18歳。立命館守山高3年。2017年トップアスリート発掘事業で才能を見い出され、競泳から転向。昨年9月に日本新記録の60㌔に成功。今年2月の全日本選手権で67㌔を達成し、日本新記録更新。

10/21 光瀬選手オンライン取材

目標もイケメン　女子部員ワクワク

「すごいイケメン。ぜひ取材したい」という女子部員たちの熱い思いに、快く応じてくれた光瀬智洋選手。東京大会への抱負を尋ねられ「日本人初のメダリストになりたい」と力強く宣言。思わず「おおお〜」と歓声が上がった。

メダリストと並ぶ夢は「俳優もやってみたい。喜怒哀楽いろんな気持ちを伝えられる仕事って素晴らしい」とのこと。部員たちは「実力もあって、夢も大きくて尊敬する」と目を輝かせた。

こうせ・ともひろ　男子59㌔級、27歳。大学入学式の前日に電車との接触事故で脊髄損傷。2016年、次世代選手発掘事業でパラ・パワーリフティング選手に選抜。今年2月の全日本選手権に続き、10月の京都チャレンジカップでも同階級優勝。

10/26 先生・生徒の体験会撮影

Ｔシャツ何枚上がる？

文化祭の準備も佳境を迎えたこの日は、Ｔシャツを載せた手作りのバーベルで体験会を撮影。放課後、先生や部員以外の生徒たちが競技に挑戦した。

左右のかごにＴシャツを積み、一度胸まで降ろしてから持ち上げ、3秒間静止させるのがルール。少しでもバランスが狂うとこぼれ落ちてしまう。パラ・パワーリフティングでは、重量だけでなく左右を平行に、美しく持ち上げることも大切だ。

記録を競って盛り上がったのは意外にも先生方で、最高記録は46枚。生徒のベストは38枚で、チャレンジのたびに声援が飛んだ。

10月下旬 動画編集＆号外制作

見やすく読みやすく工夫

インタビュー取材や体験会の撮影を終えると、見やすい映像にするための動画編集作業が待っている。締切が迫る中、多くの部員が手分けをして作業を行った。佐野、森崎、光瀬3選手へのインタビュー取材は、産経新聞の号外新聞作成アプリ「かんたん号外くん」を使って、号外も制作した。

11/2、3 オンライン文化祭

「競技の素晴らしさ　知ってもらえた」

完成した力作動画は競技の紹介やお礼メッセージを含めて6本。選手たちのインタビュー動画では、競技に臨む姿勢も盛り込んだ。作品は文化祭のホームページ（https://sites.google.com/junten.ed.jp/syahuku/top）に掲載。初日は校内で、2日目からは外部にも公開された。

取材に協力した3選手も見てくれたといい「良かったよ」と連絡をもらった。部員の家族や友人たちからは「パラ・パワーリフティングって知らなかったけど、面白そうだね」という感想を聞くことができた。

部長の冨澤二葉さん（高校2年）は「パラ・パワーリフティングという競技の力を知ってもらえてよかった。選手への取材では連盟の方も知らない答えがあって、中高生の視点を出せたかなと思う」と笑顔で締めくくった。

今パラパワーが熱い
限界を超えろ

②部員が作成した佐野選手のオリジナル号外
③完成した動画。体験会の動画では先生、生徒たちのチャレンジを見やすく記録した

動画はこちらから

活動を振り返って　部員たちの思い

冨澤二葉（部長・高2）　中1から過去5年間の部活動でも最大級のイベントでした。中学生も含めて頑張ってくれた部員の皆に感謝の気持ちでいっぱいです。でも、今回の企画は“第一歩”。ここから私たちがパラスポーツの魅力をどれだけ伝えていけるかが大切だと考えています。

サマラウィラ星嵐（高2）　体験会の準備を担当。たくさんのＴシャツを載せるので、バーの強度を出す工夫をしました。これまでパラ・パワーリフティングは知らなかったけれど、障害を負っても希望を見つけられることを知り、勇気づけられました。

菅原瑞希（高2）　「美しく持ち上げる」ことも重要と知り、そこにパラ・パワーリフティングの魅力を感じ、佐野選手の取材では、障害が決してマイナスなものではないことを学びました。競技の印象が大きく変わり、取り組んでよかったと思います。

大原亜里咲（高1）　佐野選手の練習を見学し、バーベルを挙げるときの緊張感が伝わって、生の迫力ってすごいと思いました。あれは映像じゃ伝わらないかも。でも、自分が感じた「見方が変わると面白い」というのが動画で伝わるように工夫しました。

鈴木悠平（高1）　初めての取材はとても不安でしたが、選手の方々が優しく丁寧に教えてくださいました。実際に見たときの迫力はすさまじく、競技を体験して、実際にはものすごく重い物を持ち上げていたことをようやく実感しました。

戸田光玲（高1）　森崎選手の取材、動画編集を担当。取材では聞きたいことをどう質問したら、的確な答えを引き出せるのかに気を使うと実感しました。頑張っているパラ選手がたくさんいると知り、これからは五輪と同じ熱量で応援できると思いました。

衣類寄付でパラ団体支援、学習活動

家庭などからまだ着られる衣類を寄付してもらい、業者に売却した収益全額で、5つのパラ競技団体を応援するプロジェクト。寄付された衣類は海外で選別され、世界15カ国で再販売される。2016年の開始以来、累計360㌧が集まり、約610万円が競技団体などに寄付された。

また、小中高校では、衣類の循環処分の現状などを題材とした環境問題や、パラスポーツをきっかけに共生社会を考える出前授業など、新聞を活用した学習も行っている。

詳細は公式サイト（www.fukunowa.com）まで。

活動を振り返って　部員たちの思い

増原麻璃奈（高1）　スポーツ選手はすごくストイックなイメージでした。でも佐野選手が「チョコが好き」と知り、遠い存在だったパラ選手を身近に感じました。緊張して話をうまく引き出すのが大変でしたが、パラリンピックが楽しみになりました。

松田健吾（高1）　動画編集が大変でしたが、楽しかったです。選手たちは毎日数時間練習したり、体重を落としたり、生活を変えることまで平然とやっていて、アスリートはすごい。知識としては知っていたけど、今回改めて実感しました。

松村玲奈（高1）　初めてパラ・パワーリフティングという競技を知ったので、体験会に人が集まってくれるか心配でしたが、たくさんの人が協力してくれてよかったです。取材では準備の大切さを実感。次の機会があれば、反省を生かして質問したいです。

森田翼翔（中3）　パラ・パワーリフティングは重さだけでなく、持ち上げるフォームの美しさなども競っていると知り、奥が深い競技だと思いました。体験会では競技ルールを守り、かつ楽しく見せる工夫をしました。動画で魅力を知ってもらえたので満足です。

人に伝えるための視点が学びに

順天中・高社会福祉部顧問
三井田真由美教諭

学校外の方と行う体験学習では、学校で得られないものが得られます。パラ選手に接し、生徒たちは「自分たちと変わらない」というマインドを持ちました。それを当たり前に持った生徒たちを一人でも多く送り出したいと願っています。また、取材と動画・号外新聞の制作を通じて、人に伝えるための視点を得たことも学びになりました。この経験を生徒たちが何につなげるか。それをアシストしていきたいと思います。

若い人々の伝える力は大きい

日本パラ・パワーリフティング連盟
吉田進理事長

パラ・パワーリフティングは、障害者スポーツのなかでも最も知られていない競技の一つです。だからこそ、若い方々の力は大きい。彼らは良い経験をすれば、仲間に伝えてくれるからです。今回も障害があっても能力を鍛え、前向きに努力する選手たちから伝わるものがあったはず。それを中高生の目線で伝えてもらうことは、われわれにも大きな意義があります。こうした取り組みを今後も続けていきたいと考えています。

順天中学・高校社会福祉部のみなさま
バーベルを高〜く上げてくれてありがとう!
動画、楽しませていただきました。
バーベルのウエイトとして登場した
このTシャツは私たちフジボウの
「B.V.D.」の製品です。

Next to myself I like B.V.D. best®
B.V.D.®
LEGENDARY QUALITY SINCE 1876

B.V.D.とは
140年以上前に
アメリカ・ニューヨークで誕生。
長きにわたって愛されている
アンダーウエアブランドです。
●発売当初の広告

フジボウの
環境対策
私たちフジボウは環境対策を強化しています。
製品パッケージには、焼却時にCO2の
発生を大幅に抑える素材を使用。
紙製の製品タグも、厳しく管理された
森林からの原料を使用しています。
世界の森林保全
CO2 OFF!

フジボウは
パラスポーツを応援しています。
私たちはふくのわプロジェクトのオフィシャルパートナーとして、
パラスポーツを応援しています。
私たちと一緒に衣類を寄付してパラスポーツを応援しませんか?
衣類の寄付先:茨城県稲敷市西代703ふくのわ係
（送料は寄付者負担）

ふくのわプロジェクトとは
衣類のリユースでパラスポーツを応援しよう!
使わなくなった衣料の回収を行い、専門業者を通じて
売却し、その収益金でパラスポーツを応援します。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
FUJIBO
The Focus on Innovation
富士紡ホールディングスは持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。